

比喩的構造にもとづく否定形式の表現

小 出 美河子

キーワード

談話資料 落語 否定形式 比喻 意志表示

1 考察対象

母親が高校生の子供を叱るのに、

(1) 小学生じゃないんだから！

という言い方をすることがある。高校生の子供に向かって、「おまえは小学生ではない」というのは、文字どおりには当たり前の情報しか送っていない。しかし、母親がここで「おまえは小学生ではない」と発話する裏には、高校生の子供（の言動）が、母親の目には小学生同然に映ったという前提があるはずである。

このように考えると、上の場面における「小学生じゃないんだから！」という発話は、比喩として下のような構図をもつことになる。

- a. たえられるもの ：（この場面における）高校生の子供
b. たとえるもの ：（一般的な）小学生
c. 上の二者（aとb）の共通点 ：子供じみた言動

管見では、この種の表現はこれまで、研究対象として正面からとりあげられたことはない。その理由を推測すると、この表現が典型的な「比喩表現」ではなく、比喩的構造をふまえた表現にすぎないから、比喩研究の研究対象としては周辺的なものとみなされること、また、文学作品における出現頻度がそれほど高くなく、研究対象となりにくかったこと、などがある。

げられる。比喩研究の範疇でこの表現に言及した文献は、山梨正明 (1988, p 38) などごく少数である。

しかし、日常会話や談話資料などを調べてみると、この種の表現は一つの表現形式として認められるものである。本稿は談話資料として落語を取りあげているが、落語に登場するこの種の表現を、野村雅昭 (1996b, p 91-92) はレトリックの一つとしてとらえている。野村氏は、

「……ではない (…じゃあねえ)」あるいは「…ではあるまいし」という否定のいいかたが、比喩になることがある。志ん生には、この種の例がおおいようにおもわれる。

と述べ、これを比喩として認める立場をとっている。

本稿では、このような表現を「比喩的構造にもとづく否定形式の表現」と名付け、その特性について考察を行う。考察は、「～ではない」「～するのではない」の形式を中心とし、類似表現については最後にまとめて触れることとする。

2 資料について

2. 1 談話資料としての落語

本稿では、上に述べたような理由から、日常言語の談話展開に着目して考察を行うこととし、資料として落語の速記本を用いた。

落語を日常言語のケーススタディとして考えることについては、異論もあるだろう。多くの落語が聴衆を笑わせることを目的としており、登場人物のやりとりには、通常では考えられない作為的なもの、ナンセンスなものも含まれるからである。これからあげる用例について言えば、比喩が突飛で不自然であると感じられるものもあるかもしれない。

確かに、落語は話芸として完成されたものであり、コミュニケーションの構造も、後述のように日常言語とは異なる面がある。また、特定のレトリックに限定して考えた場合、落語と日常言語とでは使用頻度が異なることも考えられ、落語と日常言語をすべての面で同等とみなすことはできな

いかかもしれない。

しかし、落語の個々の表現や語彙が一見、非日常的に思える場合でも、談話の展開そのものは日常言語と同じく一定の規則に則ったものであり、落語を日常言語の一種のパターン、ケーススタディとして試用することは、その意味で有効であると考ええる。

本来であれば、日常言語の用例も同じく考察対象とすべきであるが、落語資料の分量に見合う用例数を集めることが困難であったという事情もあり、今回は落語資料のみの分析を行うこととした。

2.2 用例の扱い

ここで、資料の扱い方について、あらかじめ断っておく。

落語におけるコミュニケーションの形態は、独話を除くと、

①落語家と聴衆のコミュニケーション

②落語の登場人物間のコミュニケーション

の二つから成り立っている（野村1994, p 47-48）。本稿では、引用はすべて登場人物間のコミュニケーションとし、落語家と聴衆の間のコミュニケーションは考えないこととする。つまり、用例中の会話はその会話を行う登場人物の意図に従って進められるものとし、落語家が落語のくすぐりや聴衆へのサービスとしてその表現を口にしているという観点は、一切とらない。

(注1)

なぜこのような断りが必要であるかという点、これからとりあげる例は、実際の落語の中では笑いに結びつく場面に登場するものが多いからである。登場人物の発話意図を考察するときに、「聴衆を笑わせるため」という見方を持ち込むと、コミュニケーションを分析する観点が上の二つの間で混乱することになる。このような混乱を避け、考察の姿勢を一定に保つため、あらかじめ整理を行った。

3 分析

3.1 基本的機能

以下では、否定形式の表現の背後にある比喩の特性を、用例を見ながら検討していきたい。引用中の（ ）内の補足は速記本に記述されたもの、〈 〉内の補足は筆者が施したものである。用例は独話、もしくは人物Xと人物Yによる対話である。考察対象となる言語表現には下線を付し、下線部分の話し手が人物Yとなるよう、例示の方法を統一した。

次の例は、仇討（実は作り事）を見物にきた聴衆の間で交わされた会話である。

(2) Y「吉つあん、え、どうしたい仇討は」

X「(がっかりして) 日延べだとさ」

Y「(くやしがつて) えッ、日延べ? 日延べ冗談じゃないよ。商人が店開きをするんじゃないよ、仇討の日延べってエのがあるかい」

【三代目三遊亭金馬：高田の馬場】

ここには、次のような比喩的構造が存在する。

a. たとえらえるもの：武士の仇討

b. たとえらえるもの：商人の店開き

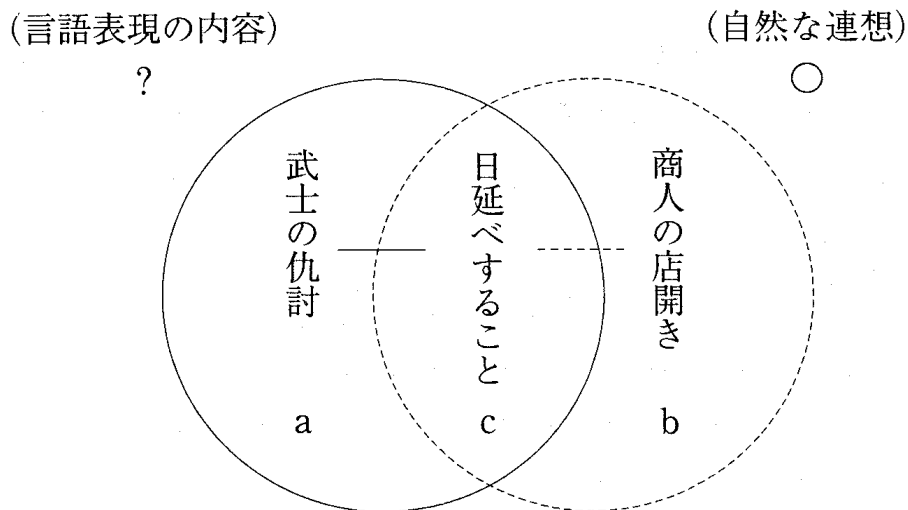
c. aとbの共通点：日延べすること

「(この場面における) 武士の仇討の様子(=a)が、まるで商人の店開き(=b)のようだ」という比喩の関係を、「 $a \doteq b$ 」と示すことにする。また、「武士の仇討は商人の店開きではない」という事実関係を、「 $a \neq b$ 」と示すことにする。これらの記号を用いて整理すると、上の例は、話し手の側から見れば「 $a \doteq b$ を前提として、 $a \neq b$ を指摘している」ということができる。

すると、「 $a \neq b$ 」を指摘することは、単に「武士の仇討は商人の店開きではない」という事実確認をしているのではなく、「bでないaに、cとの結びつきが生じるのはおかしい」という、人物Yの意志表示であると

考えられる。

この関係を試みに図式化すると、次のようになる。



言語表現によって示された状況である a (たえられるもの) → c (共通点) は、人物 Y にとって違和感のある結びつきである (図に「?」を付す)。これに対して、b (たええるもの) → c (共通点) は、人物 Y にとって、ごく自然に連想できるものということを意味する (図に「○」を付す)。実際に生じている状況と人物 Y の頭の中での個人的連想を区別するため、a と b はそれぞれ実線と点線とした。

この例では、話し手の意志表示は不満の表明と言い換えてもよい。実際、「～ではない」が不満の表明である例は多い。しかし、この表現がかならずしも積極的な不満の表出であるとは限らず、独り言として終わることもある。このように、話し手の意志表示には段階のあることが考えられるが、程度の差こそあれ、比喩的構造をもったこの種の表現が、広い意味で、状況に対する違和感の表明であるということは言えるであろう。

そもそも、相手に対して否定形式の表現を用いるということ自体が、すでに否定的評価、否定的感情の表出である。しかし後述のように、比喩的構造を背景とすることで否定的感情の程度を相手に印象づける効果が生まれ、比喩の存在が、意思伝達そのものに寄与していると考えることができ

る。そこで、比喩的構造が意思伝達にどのようなかかわってくるのか、以下考察を進めていく。

3. 2 ベースとなる比喩の構造

上で述べた意志表示を行う際に、比喩はどのような働きをしているのだろうか。用例中もっとも多く見られる不満・怒りの表出の場合について、考えてみたい。

(2)の例を、聞き手である人物Xの側から見てみよう。

人物Xは、「商人が店開きをするんじゃないよ」という人物Yの発話を聞いて、まず「a (武士の仇討) ≠ b (商人の店開き)」という文字どおりの意味を理解する。しかし、この会話がそもそも「武士の仇討」についてのものであることは、「どうしたい仇討は」という人物Yの発話からも明らかである。すると、「a ≠ b」であるという指摘は、人物Xにとって明らかに唐突なものである。それでは、なぜ人物Yはわざわざわざそのようなわかりきった内容の指摘をするのか。人物Yにとっては、上の文脈における「武士の仇討」が「商人の店開き」に匹敵する状態であると思われたからだ。そこで、人物Xは人物Yの不満の表明を読みとるわけである。

ここで注目したいのは、「武士の仇討」と「商人の店開き」の奇妙な組み合わせである。表現として定着していないということを差し引いても、この比喩は非常に斬新な印象を与える。たとえられるものとたとえるものの組み合わせに意外性のあることが、斬新な比喩を生み出す条件の一つであるとよく言われるが、「～ではない」という表現において比喩が斬新であるということは、レトリックとして質が高いということのみならず、効果的な伝達にも寄与すると考えられる。なぜならば、聞き手の立場になった場合、比喩が斬新であるということは、話し手の発話意図が何であるかについて、より注意を喚起されることになるからである。この点を、少し詳しく見てみたい。

「～ではない」の表現で、比喩の構造がいかに話し手の意志表示を支え

ているか、(2)の例の図を用いて、もう一度考えてみる。話し手は、a（たとえられるもの）→c（共通点）の状態を記述するため、まず、一般的にcとのつながりを連想しやすいbなるものを持ちだし、cとの関連があるという点で「 $a \doteq b$ 」を設定する。そのうえで、「 $a \neq b$ 」と発話することにより、a（たとえられるもの）→c（共通点）への流れに対する話し手の違和感を表明する。

そうすると、本来cとのつながりを連想しやすいbというものと、実際にこの文脈でcとつながりをもっているaとの組み合わせが突飛であればあるほど、 $a \rightarrow c$ への流れをいかにその場面にふさわしくないものと判断しているかという、話し手の意志を明確に伝えることができる。「 $a \doteq b$ 」が比喻として斬新であるほど、聞き手はより強いインパクトをもって、現状に対する話し手の違和感を感じとることとなる。

このように、比喻の斬新さが意思伝達に寄与している例は多く見られる。次の例の人物Xは、家賃を滞納して大家に大工道具をとりあげられた身内のために、家賃を肩代わりして大工道具をとりかえそうとする大工の棟梁である。支払った代金が、滞納している金額に若干及ばなかったのもので、そのことで大家（人物Y）に文句を言われている。そして、以下の会話へと続く。

(3) X「じゃこうしやしょう、^{あと}残金の八百ンとこアねエ、すぐうちの^{やっこ}奴に
放り込ませやしょう」

Y「(次第に気分を荒らげ) よしとくれよ、うちは^{さいせんばこ}賽銭箱じゃねんだ
から、むやみに放り込まれてごらん、当たりどこが悪けりゃ^{けが}怪我
しちまわな」

【五代目柳家小さん：大工調べ】

ここでは、a = 「賽銭箱」、b = 「大家の家（大家の手元）」という解釈が成り立つが、この比喻も(2)と同じく突飛なものである。こうして文脈に大きく依存して成り立つ斬新な比喻は、採集した用例の中に多く見られる。

しかし、さらに用例を見てみると、話し手の意志表示を支えている比喻

は、必ずしも突飛であつたり、斬新なものばかりとは限らないことがわかる。斬新な比喻は聞き手の注意を喚起するが、話し手の意志表示を聞き手に伝える比喻が、必ずしも目新しいものである必要はない。次の例は夫婦の会話である（人物Y＝妻，人物X＝夫）。わけあって吉原に身を寄せている娘を父が迎えに行こうとするが、外出しようにもバクチに負けてろくな身なりをしていない。そこで、妻の着物を借りようとする。

(4) Y「〈着物を脱いでしまったら〉^{はばかり} 厠所ィ行けないよ」

X「厠所へ行けねえったっておめえ、我慢しねえな」

Y「我慢しろったって、そうはいかないやね」

X「まァいいよ、少しぐれえ、なんだァな、ええ？　ちょいとおめえ、流しの隅かなんかへしょぐつとけ」

Y「馬鹿なことをお言いでないよ、猫じゃないやね」

【六代目三遊亭圓生：文七元結】

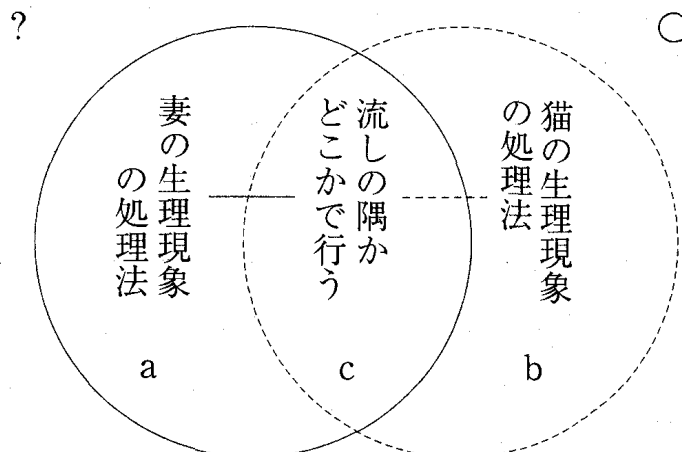
この比喻関係を端的に示すことは難しいが、おおむね次のようなものである。

- a. たとえられるもの：妻の生理現象の処理法
- b. たとえるもの　　：猫の生理現象の処理法
- c. 共通点　　：流しの隅かどこかで行う（＝適当に処理する）

これを先ほどのように図式化すると、次のようになる。

（言語表現の内容）

（自然な連想）



妻は自分に要請された行為を、猫のそれにたとえて説明している。妻はここで、「私は猫ではない」という事実関係を指摘したいのではない。夫の自分に要請した行為が、妻にとっては a (妻) \equiv b (猫) と認識されるほどばかっているということを、 $a \neq b$ という指摘を通じて訴えているのである。

人間を犬や猫にたとえる言い方は、表現として決して新鮮なものではない。しかし、ここではやはり、猫がひきあいに出されているところにインパクトがあり、話し手の意志表示を効果的にしていると思われる。

「人間 (=動物より理性的で上位の存在)」を「動物 (=人間より原始的で下等な生物)」にたとえる考え方は、聞き手に一種の衝撃を与えるものである。特に言葉の世界において、人間と対比されたときの犬や猫は、下等な動物の典型として扱われる傾向にある。ここで「人間」 \equiv 「動物」の関係が与えるインパクトは、「人間」のステレオタイプと考えられるものと「動物」のステレオタイプと考えられるものの間の距離感から来ている。空間的に考えると、ゼロよりプラスの方向に位置する「人間」の価値が、マイナスの方向に位置する「動物」の価値へ反転してしまったような感じである。この、ゼロ地点をはさんだ a と b の対照関係が、「～ではない」形式を支える比喩の斬新さの本質部分ではないだろうか。

同様の例をもう一つあげる。貧乏長屋の住人たちが、景気づけに花見でかける。目的地に到着し、大家である人物 Y が花見の支度を促す。

(5) Y 「おい、さあ毛氈^{もうせん}を……。なんだなんだ……。どうすんだ？ こんな細長く敷いて」

X 「へえええッ。これはまァみんなこう、なんです、一列に坐りましてね、頭ァ下げて……」

Y 「(あきれて) おい、乞食の稽古すんじゃねえ。まァるく坐れるように敷かなきゃァしょうがねえ、ええ？ そうだそうだ。」

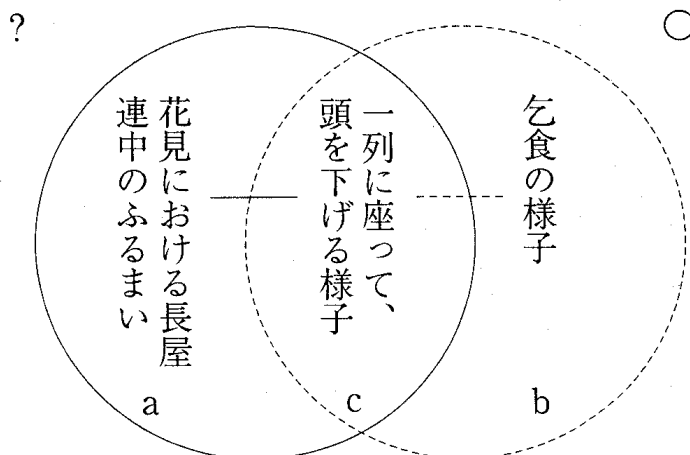
【五代目柳家小さん：長屋の花見】

比喩の要素と、要素間の関係は次のとおりである。

- a. たとえられるもの：花見における長屋連中のふるまい
- b. たとえるもの：乞食の様子
- c. 共通点：一列に座って、頭を下げる様子

(言語表現の内容)

(自然な連想)



花見における長屋連中のふるまいが、乞食の物乞いの様子にたとえられていることを通じ、ここでは、a = 「長屋の人間（一般庶民の典型）」に b = 「乞食（生活力のない卑しむべき存在）」への価値の反転を認めることができる。(4)とは違い、同じ「人間」の枠内のことではあるが、「人間」の中での価値の序列に従うと、この二者の関係もゼロ地点をはさんだ対照的な関係になる。

上の2例は、対照的関係のわかりやすいものとして、aとbの関係がプラスとマイナスにあるものを取りあげた。しかし、必ずしもプラスとマイナスという価値判断と結びつかない対照的関係もある。次の例は、遊郭の若い衆（人物X）と客（人物Y）の会話である。

(6) X「おーと人^りさまでいらっしゃいますんで……？」

Y「なにをこの野郎。おーと人^りさまでいらっしゃいますか？ てめえのここへ（自分の両眼を指し）二つ^{しか}光ってんのは何だ……ぴかぴかしてんのァ。銀紙張ってあるわけじゃアねえんだろう、見^みえるんだ

ろう。見りゃアわかるじゃアねえか」

【六代目三遊亭円生・五人廻し】

比喻の要素と、要素間の関係は次のとおりである。

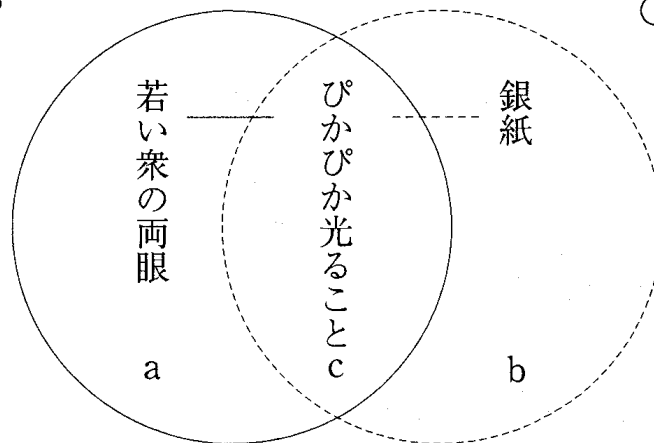
- a. たとえられるもの：若い衆の両眼
- b. たとえるもの：銀紙
- c. 共通点：ぴかぴか光ること

(言語表現の内容)

?

(自然な連想)

○

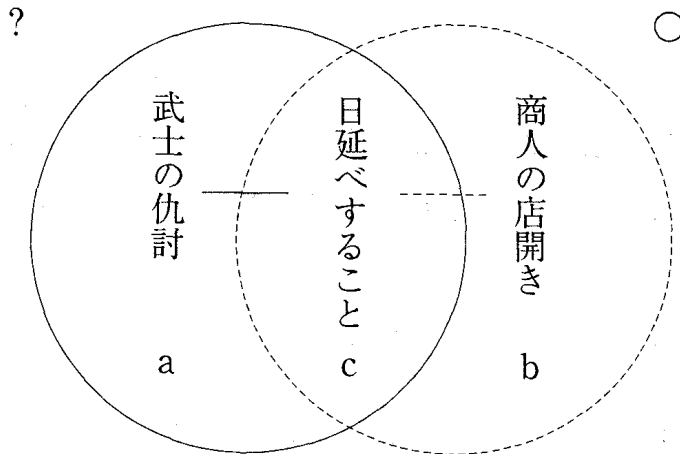


ここで、「両眼」→「銀紙」の関係に、これまでのようなプラス・マイナスの反転を認めることは難しい。しかし、生命あるものが無機物にたとえられていることを考えると、「両眼」「銀紙」の関係が違う意味で対照的であることがわかる。「その目は節穴じゃないだろう」という慣用表現があるが、身体部位がただの物体になぞらえられることは、罵倒の言葉として相当に痛烈である（ここにおけるb→cの「ぴかぴか光る」と、a→cに本来求められる「ぴかぴか光る」では内容が異なることに注意したい。前者は単に物理的に放たれた光という意味であるが、後者の「目の光り」は、識別能力、判断能力があるといった含みをもつ光である）。

(2)の「武士の仇討」の例も、これと同じ種類の対照関係にあると思われる。もう一度、先ほどの図をあげる。

(言語表現の内容)

(自然な連想)



ここでも、 $a \rightarrow b$ の間にプラス・マイナスの反転を認めることはできない。しかし、「武士の仇討」における真剣さや緊迫感と、「商人の店開き」の日常的な感じを比べると、やはり対照関係をなしているといえる。この関係も、特定の文脈でaとbがペアとなったことで臨時的に生まれるものである。

極端な例では、次のような誇張表現も対照関係の一つだろう。銭湯で早く湯に入りたいという男が、連れに言う。

(7) Y「(連れに) おうおうおう、はやく着物を脱げ、着物をよォ、え？
着物を脱ぐんだよ」

X「いま待ちねえ」

Y「待ちねえじゃねえや、長エなァこんちくしょう、なにしてやんだ
なァ、お前、^{まい}着物を脱ぐんだよ、おい、身体^{からだ}の皮むくんじゃねえぞ
こんちくしょう」

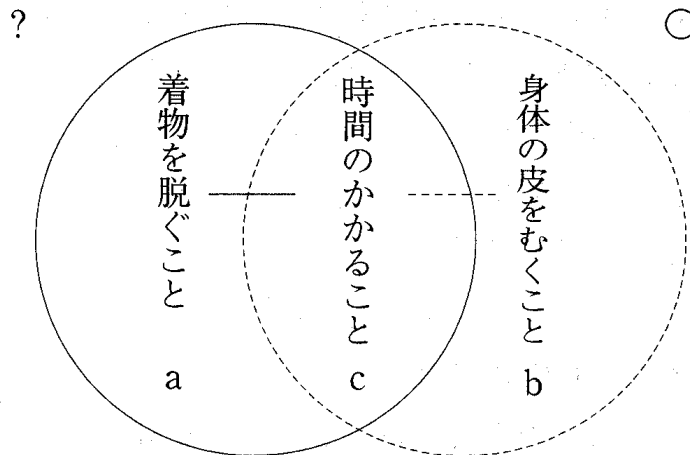
【五代目古今亭志ん生：強情灸】

比喩の要素と、要素間の関係は次のとおりである。

- a. たとえられるもの：着物を脱ぐこと
- b. たとえるもの：身体^{からだ}の皮をむくこと
- c. 共通点：時間のかかること

(言語表現の内容)

(自然な連想)



実際に「身体の皮をむく」とはどういうことであるか、身をもって知っている人はまずいないだろうが、時間のかかることの比喩としては妙にリアリティがある。たとえとして誇張されていることが、かえって男のいらだちを効果的に伝えている。ここでは、aの日常卑近な事柄と、bの非現実的な事柄のペアが対照関係を産み出し、聞き手に突飛な印象を与える。

以上の考察で、比喩がインパクトをあたえる要因の一つに、たとえるものとたとえられるものの対照関係のあることを確認した。この対照関係が産み出すaとbの距離感、落差とでもいうものが、比喩のインパクトになるのである。

この距離感は、文脈に依存して生まれることが多い。aとbの要素だけを取り出して羅列し、何が何にたとえられるかという対応関係だけを機械的に分類してみても、ほとんど意味がない。次の二つの例を比較すると、そのことがわかる。

(1) 小学生じゃないんだから！

(1)' 中学生じゃないんだから！

ここで両者を比べると、話し手の意志表示としては明らかに前者の方がインパクトをもつ。両者の表現効果の違いは、「小学生」と「高校生」という名詞そのものの違いからは現れない。問題になるのは、あくまで「高

校生—小学生」と「高校生—中学生」の距離感の違いなのである。

「～ではない」形式にあらわれる比喩のすべてに、上での述べたような対照関係や距離感があらわれるとは、言い切れない。また、距離感の有無、距離感の測定も、残念ながら主観的なものに頼らざるを得ない。しかし、距離感の存在こそ、比喩をベースとした「～ではない」形式を支える大きな要素の一つであることは確かであろう。

3. 3 談話の流れと比喩の形成

「～ではない」形式の表現において、たとえるものとたとえられるものの距離感が重要な役割を果たすことはこれまで述べてきたとおりだが、そこで生みだされる比喩に、それより以前の相手の発話に誘発されているものが多く含まれていることに注意したい。

次の例は、花見の余興として仇討を演じ、花見客をいっぱい食わせようという男たちの会話である。

(8) Y「変な身装^{みなり}してるから人が集まったよ、ほら、ごらんよ、はじめろはじめろ」

X「ええ？」

Y「はじめろよッ」

X「待つつくれ、そんな急ぐもんじゃねえよ。一服やってからそろそろはじめろから……」

Y「大掃除じゃねえんだよ」

【三代目三遊亭金馬：花見の仇討】

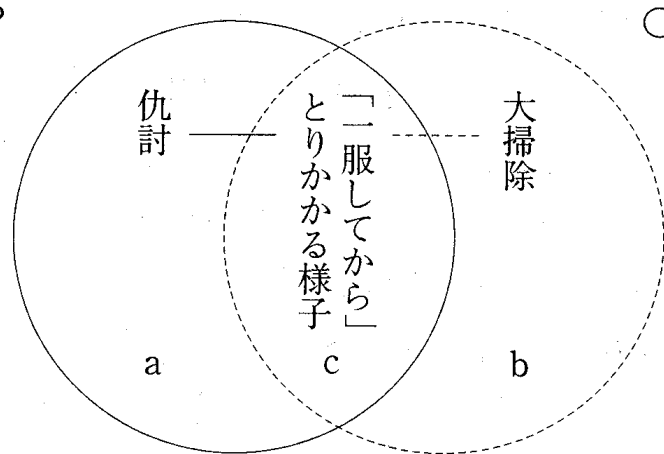
比喩の要素と、要素間の関係は次のとおりである。

- a. たとえられるもの：仇討
- b. たとえるもの：大掃除
- c. 共通点：一休みしてから（「一服してから」）とりかかる様子

ここで、b = 「大掃除」はa = 「仇討」との距離感を打ち出すために設

(言語表現の内容)

(自然な連想)



定された言葉ではあるが、「大掃除」という言葉が人物Yによって単独で作り出されたものとはいえない。直前の人物Xの発話「一服やってから」という言い方に、すでに、「大掃除」を連想させる比喩性が含まれているのである。仇討を前にしての「一服やってから」という発話内容に対し、このあと人物Yが非難の意志表示をするのは自然の流れであるが、「大掃除」という具体的な表現が「一服」という言葉に誘われて出てきたことは間違いなさだろう。

これまで見た用例の多くにも、この傾向が強く認められる。例えば、
(2) Y「(くやしがつて) えッ、日延べ? 日延べ冗談じゃないよ。商人が店開きをするんじゃないやねえよ、仇討の日延べってエのがあるかい」

においては、直前の発話者Xによる「日延べ」という言葉そのものが、「商人の店開き」という表現を誘発しているところがあるし、

(3) Y「(次第に気分を荒らげ) よしとくれよ、うちは賽銭箱^{さいせんばこ}じゃねんだから、むやみに放り込まれてごらん、当たりどこが悪けりゃ怪我^{けが}アしちまわな」

においては、直前の人物Xの発話である「放り込ませやしょう」が、「賽銭箱」という言葉を生む土壌となっている、

この傾向が進むと、表現内容とは関係なく、表現そのものが聞き手に違

和感を与え、「～ではない」の発話を登場させることになる。次の会話は、居酒屋の客（人物X）と小僧（人物Y）の間で交わされたものである。

(9) X「どうでもいいけれど、おめえの指は親指ばかりかい。小指があるのかい。よく見せろよ。太さも長さも、みんな同じじゃあねえか。バナナを5本並べたようだ。（略）肉付きがいいな。身がいっぱい入っているな。月夜に取れたんじゃないか」

Y「(むきになって) 蟹じゃアありませんよ」

【三代目三遊亭金馬：居酒屋】

比喻の要素と、要素間の関係は次のとおりである。

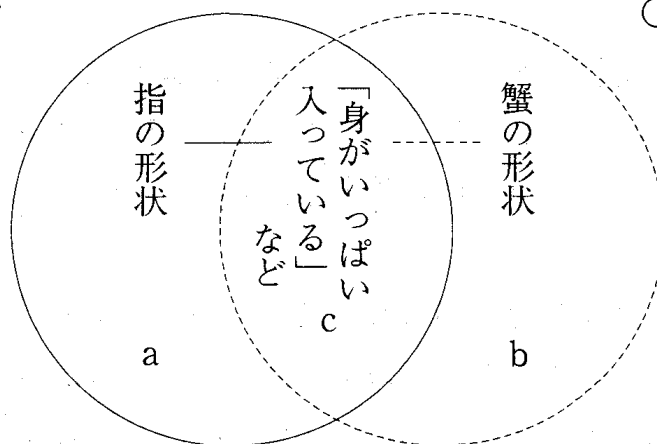
- a. たとえられるもの：指の形状
- b. たとえるもの：蟹の形状
- c. 共通点：肉付きがよいこと（「身がいっぱい入っているな」「月夜に取れたんじゃないか」）

(言語表現の内容)

?

(自然な連想)

○



ここで小僧がむきになっているのは、手の形を揶揄されたという事実のためだけではない。「おめえの指は親指ばかりかい」を耳にした瞬間から、恐らく心の中で徐々に高まっていた反感が、「身がいっぱい入っている」「月夜に取れた」などという、明らかに誇張した、非現実的な表現に接し

て頂点に達したのだろう。

下線部の直前の発話「身がいっぱい入っているな」「月夜に取れたんじゃねえな」は、これ自体がすでに、ある程度限定された比喻の要素を連想させるものである。人物Yは、人物Xの発話から「蟹」という比喻要素を読みとり、Xに対する反感を「蟹じゃありませんよ」という言い方で表現したのである。

次の例は、町人と武士のいざこざを見物している群衆の中に、武士に罵倒の言葉を浴びせる男の発話である。後ろに立っている別の男が、この男に向かって「一言言うたびに首をすくめるのはやめてくれ。侍がこっちを見ると、俺が侍ににらみつけられる格好になるから」と文句を言う。すると、この男が、その事実を確かめようとする。

- (10) X「あ、そうかねえ……やってみましようかねえ、じゃ……馬鹿侍ッ
(と言って、首をひょいッとすくめ) ほぅほぅ、なるほど、ちょうどこの見当へあたりますね」

Y「火事じゃアねえやな」

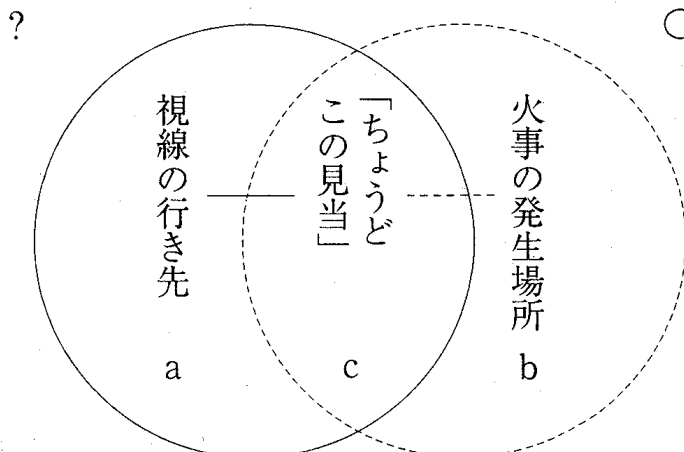
【三代目桂三木助：たがや】

比喻の要素と、要素間の関係は次のとおりである。

- a. たとえられるもの：視線の行き先の特定
- b. たとえるもの：火事の発生場所の特定
- c. 共通点：方向、場所（「ちょうどこの見当」）

(言語表現の内容)

(自然な連想)



この例も(9)と同じく、人物Xの発話内容というよりは、表現の仕方に対する違和感を表明したものである。ことによると自分の身に危険が及びかねない人物Yにとって、人物Xの「この見当にあたりますね」という悠長なものの言いが勘にさわったのだろう。

(注2)

このように、収集した用例中では、「～じゃない」形式の発話より前に比喩性のある発話の見られることが多いが、すべての例がそうであるわけではない。

遊郭で女に逃げられた男が、一人で悪態をついている場面で、

- (11) 「隣〈の部屋〉はまたうるさいねエべちゃべちゃしゃべってエ……
『此間と顔が変った』^{こないだ}ツてえやがら……(略)嫌な^やこといやがん
ねエ^{ほんと}本当にイ、え？ そんなに顔が変わるかァい……七面鳥の尻^{けつ}
じゃアねえやア^{ちしょう}畜生めエ」

【五代目古今亭志ん生：義眼】

というものがある。ここで「七面鳥の尻じゃアねえやア」の部分は、明らかに隣の部屋の人間に対する不平を述べているが、下線部の発話を引き出す要因となっている「顔が変わる」という言い方そのものには、特に比喩性は認められない。この男は、「顔が変わる」という事柄そのものから「七面鳥の尻」を連想したのである。このような表現を編み出せるのは、やはり落語を演じる演者のセンスであろう。

3. 4 類似表現

本稿では、「名詞＋ではない」「動詞＋ではない」の形式に限定して用例を提示したが、これと似た機能をもつ異形式の表現もある。ここで、それらを網羅することはできないが、一部紹介しておく。

3. 4. 1 直喩「～じゃあるまいし」

- (12) X「あ！ ちょいと、辰ッつあん！……お前^{まえ}さん、今度はあたしんと

こへ、ずウウツと通ってくれるかい？……そうかい、嬉しいねえ。
お前さんみたような容子^{ようす}のいい人が…どこの風の吹き回しで来たんだろ…ねえ」

Y「(嬉しそうに) おい…鮑ッ屑じゃあるめえし、変なこと言うない」

【五代目古今亭志ん生：首ったけ】

この例は、「あるまいし」が比喩の指標となっている。比喩の構造は、以下のとおりである。

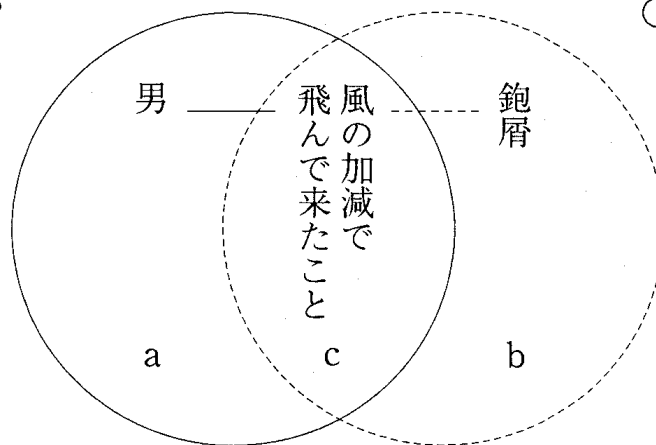
- a. たとえられるもの：男（「辰ッつあん」）
- b. たとえるもの ：鮑屑
- c. 共通点 ：風の加減で飛んで来たこと

(言語表現の内容)

?

(自然な連想)

○



「あるまいし」の場合には、これまでの例と同じく、ある状況に比喩的構造の存在することを指摘したうえで、その状況に対する話し手の違和感を表現している(12の人物Yは嬉しそうに発話したことになっており、一見、違和感の表明ではないように見えるが、人物Xの発話の内容に対しては「変なこと言うない」と否定的に應對している点から、表現の特性としては、これまでの用例と本質的に同じものであると考える。もちろん、この應對は相手に対する不満からではなく、照れの感情から出たものである

が、相手の発話を素直に受け入れようとしないところで、相手の言葉に対して違和感を覚えていると見ることができる.)).

3. 4. 2 肯定形の無標比喻

「～ではない」と同じく比喻的構造を基盤としながら、肯定形の表現形式をとるものがある。

(13) Y「そのオ女はア、アア、お前^{まい}さんになにかアい、とーんときてんのかアい？」

X「とーんときてえるんだから弱っちゃうんだよ。(略) ぶるぶるッときたとき上げると引^しっかかってらア」

Y「沙魚^{はぜ}だよすいじゃア……本当^{ほんと}なのかなア?」

【五代目古今亭志ん生：三枚起請】

ここでの「沙魚だよ」が同定表現ではなく、「女」の様子を表したものであることは文脈上明らかである。従って、(13)は

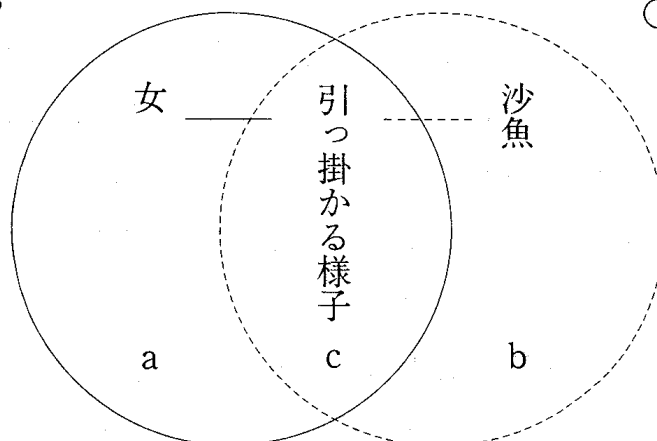
- a. たとえられるもの：女
- b. たとえるもの：沙魚
- c. 共通点：ぶるぶるッときたときに上げると引っ掛かっている様子

(言語表現の内容)

?

(自然な連想)

○



という無標比喩であることがわかる。肯定形をとっているが、結果的には、
(13)「沙魚じゃないよ」

と同じく、相手の発話内容に対する違和感を表明したものと考えられる。

それでは、(13)と(13)'の差異はどこにあるのであろうか。比喩的構造をベースとした否定形式の表現が、 $a \doteq b$ を前提としながら $a \neq b$ を指摘する表現であるということは、すでに説明したとおりである。これに対し、「沙魚だよすいじゃア」は一見「沙魚じゃないよ」と同じく違和感の表明でありながら、「 $a \neq b$ 」の前提部分である「 $a \doteq b$ 」部分を指摘するにとどまっている。つまり「沙魚だよ」は、「女 \doteq 沙魚」という比喩的構造の指摘のみを通じて、相手の発話内容に対する違和感までXに推察させようとしているのである。

このように、比喩的構造をもつ「～じゃない」と肯定形の無標比喩は、構造上連続的な関係にある。肯定形の無標比喩は、話し手の心中にある違和感まで踏み込んで表明していないという点で、否定形より間接性の高い表現であるといえる。

3. 4. 3 相手側の誤った認識を指摘する形式の表現

比喩性は少し薄れるが、次のように相手側の認識が誤りであることを指摘する言い方も、その認識に対する人物Yの違和感をにじませている点で、「～ではない」や肯定形の無標比喩と連続するものである。(14)は居酒屋にすわるよっぱらいの男(人物Y)と、彼を家まで送っていかうとしている友人(人物X)の会話である。

(14) Y「おや、コン畜生。^{えりがみ}襟髪を取って引ッ立てやがったな。コン畜生。
喧嘩か」

X「間抜けめ。喧嘩じゃアねえや。それ、俺に^お負ぶさるようになんねえ」

Y「おや、俺を猫の子だと思ってやがるな。^{ひと}俺を吊るさげやがって」

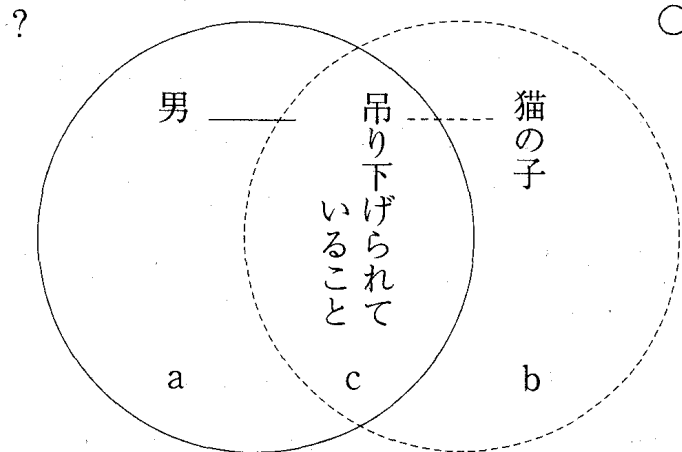
【三代目三遊亭金馬：居酒屋】

比喩の要素と、要素間の関係は次のとおりである。

- a. たとえられるもの：男（「俺」）
- b. たとえるもの：猫の子
- c. 共通点：吊り下げられていること

（言語表現の内容）

（自然な連想）



(14)と似たものに(15)の表現があるが、こちらの方は相手の認識を誤りだと明確に指摘している点で、(14)よりは伝達上の直接性が高い。(15)は、花魁が部屋に来ないことを不服に思っている客が、若い衆に八つ当たりしている場面である。

(15) X「ふざけやアがって、まごまごしやアがると頭から塩オつけてかじっちゃうぞ、この野郎ッ（くいつきそうな顔）」

Y「(略)（あわてて廊下へ逃げ出し、歩きながら）勘定は少ねえが言うことア多いや……なんだい、よくべらべらしゃべりやアがる。いちばんしまいに、頭から塩をつけてかじっちゃうって、なにを言っ
てやん、生梅と間違えてやる……」

【六代目三遊亭円生：五人廻し】

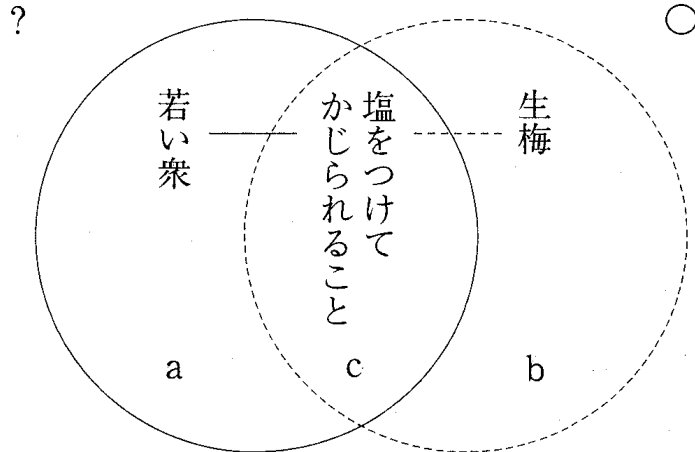
比喩の要素と、要素間の関係は次のとおりである。

- a. たとえられるもの：若い衆

- b. たとえるもの : 生梅
c. 共通点 : 塩をつけてかじられること

(言語表現の内容)

(自然な連想)



3. 4. 4 誇張表現

(16)(17)は、(15)までとは異なる種類の比喩性をもつ表現で、誇張の手段として比喩が引き合いに出されている。(16)では、ある旦那から「おごってやる」と言われて鰻屋にお供をした幫間が、途中で食い逃げされたことに気づき、悔し紛れに、店の人間に向かって食べ物悪態をついている。

- (16) 「新香を見ねえ新香を。鰻屋の新香なんて君、乙に食わせるもんだ。
このわた^{たくさん}沢山の胡瓜^{きゅうり}ッ、きりぎりすだってこんなものは食やアしねえ君。」

【八代目桂文楽：鰻の幫間】

話し手は、ここの店の新香を描写するために、いったん「きりぎりすが食べるレベルの新香」というものを設定する。ここで、「この店の新香は、あたかもきりぎりすが食べるようなもの」という比喩が成立している。さらに、実際の新香はそのレベルにも到達しないと表現してみせることで、新香がいかにひどいものであるかを説明するしくみになっている。

(16)と同様の例で、(17)では、鰻屋で料理のできあがるのが遅いと苦情を言っている客が、「おまえのところでは鰻を育ててるんじゃないか？」と

嫌みを一言。店の人間が「手前どもでは鰻は育ちません」と答えたので、それに対して次のように返す。

- (17) 「区役所^イ膳本取り^{めえ}に行ったってもう少し早いぜお前^{めえ}，ええ。客をあげ^{めえ}といってお前^{めえ}なにをしてんだよォ，早く持って来ねえな^{ほんと}ッ本^{ほんと}当^{ほんと}に^{ほんと}イ。」
- 【五代目古今亭志ん生：鰻屋】

この例では、客を待たせる典型として「区役所に膳本を取りに行くこと」を引き合いに出すことで、鰻屋の手際の悪さが鮮やかに描き出されている。

このほか、修辭疑問を用いた表現で、「～ではない」と連続的な関係にあると思われるものがいくつかあるが、現在のところ、分類の基準をたてるに至っていない。

4 まとめ

以上、比喩的構造をもつ否定形式の表現について考察を行った。要点を整理すると、次のとおりである。

- ①この表現は、ある事象がどのような状態にあるかを指摘したうえで、その状態を否定的にとらえ、違和感を表明するという話し手の意志表示である。
- ②この表現には、たとえるものとたとえられるものの間に何らかの「対照関係」と「距離感」をもつものが多く、その特性が話し手の意志表示を効果的に伝達してくれる。
- ③この表現は、それ以前の相手の発話に含まれる表現に誘発されたでてくることがあり、比喩が談話の流れの中で形成されるといえる。

今回は、否定形式の中でも一部に限定して用例を提示したが、上で述べたようなヴァリエーションを比較検討すると、比喩の果たしている機能が新たに見えてくる可能性がある。この表現が、話し言葉に多くでてくると

いう事実についても、より深い分析を加えることができるだろう。これらは、今後の課題として考察を続けていきたい。

〈以 上〉

注

(1) 例を一つあげる。現五代目鈴々舎馬風の落語「会長への道」の中で、八代目林家正蔵のエピソードが紹介されている。それによると、楽屋にいた噺家が、部屋の隅にいる正蔵に向かって「師匠、そちらは寒うございます。こちらは暖かいですから、どうぞ」と声をかけると、正蔵は「ばかやろう、洗濯物じゃねえや」と答えたそうである。「洗濯物じゃねえや」という言い方には笑いを禁じ得ないが、これがその場の笑いをとるための表現とだけ解釈してしまうと、正蔵の発話に含まれている伝達機能の部分が見落とされてしまう。本稿は、伝達機能の考察を主眼とするため、その表現が笑いと結び付くという事実はひとまず考慮せず、正蔵が相手の申し出を拒否する発言をしたという点に着眼するのである。

(2) このほかに、b（たとえられるもの）の部分に言葉ではなく、しぐさのあてはまることがある。林家三平のせりふで、おおげさに拍手を送ってくる客に向かって「明治神宮じゃないんですから」と言うものがあつたが、これなどは「拍手を送られている」という事実そのものよりも、一心に拍手を送る客の有り様がb要素としてとりあげられているのである。

〔資料〕

『古典落語 円生集(上)』(1989)

『古典落語 金馬・小円朝集』(1990)

『古典落語 小さん集』(1990)

『古典落語 正蔵・三木助集』(1990)

『古典落語 志ん生集』(1989)

(以上5点、飯島友治編／ちくま文庫「古典落語」シリーズ)

『五代目古今亭志ん生全集 第一巻』(1977)

『五代目古今亭志ん生全集 第八巻』(1992))

(以上2点、川戸貞吉・桃原弘編／弘文出版)

VTR 鈴々舎馬風「会長への道」

(NHK衛星放送「真打ち競演」1996年1月4日放送)

〔参照文献〕

- 山梨 正明 (1988) 『比喩と理解』 (東京大学出版会)
- 中村 明 (1991) 『日本語レトリックの体系』 (岩波書店)
- 野村 雅昭 (1994) 『落語の言語学』 (平凡社)
- (1996a) 「談話資料としての落語 —『火焰太鼓』を資料として—」
(早稲田大学大学院文学研究科紀要第41集第3分冊)
- (1996b) 『落語のレトリック』 (平凡社)
- 小出美河子 (1996) 「談話に於ける誤解修正の形式 —落語を資料として—」
(早稲田大学大学院文学研究科紀要第41集第3分冊)

付 記：本稿は、話芸テキスト研究会および日本文体論学会第69回大会で行った口頭発表の内容にもとづくものである。